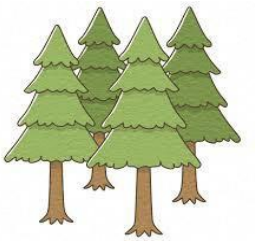
大杉の史跡と伝説



小松の山奥「大杉」とは、梯川上流部の赤瀬ダムよりさらに奥に位置する下大杉、大杉中町、大杉本町、大杉上町の４つの集落を言い、古代から人が住み今日まで悠久の歴史を綴ってきました。
その営みの足跡は、多くの史跡や伝説となって残されています。以下にその幾つかを下流側から紹介します。

１．　茗ヶ谷化石

下大杉の山、動山(604m)の麓、茗ヶ谷に珪化木等の化石層があり、現在でも容易に手に取って観察することができます。赤瀬ダム湖の傍の橋詰から動山の方向へ 500m 程入った場所です。(かつて恐竜等がノッシ・ノッシと歩いていた姿を想像して夏休みの研究にいかがですか・・・・)

２．　名号岩（みょうごういわ）

元の位置

昔、下大杉の大火の折、円光寺も類焼した。その時、親鸞聖人の書かれた『行住要集』の一部分が火風に煽られて飛んできて、道端の大岩に掛かっていたので「**あらもったいなや、ありがたや**」と人々が岩に穴を穿って地蔵を祀ったと言われています。
元は谷底の旧道脇にあったが、現在は新道の脇に移設されています。

３．　戸谷（とたに）のまんぼ（トンネル）県道４３号丸山加賀線

大杉から町へ出るには小松方面へ出る道と江沼郡(加賀市)へ出る道がありました。
赤瀬ダム湖左岸の戸谷の奥には、菩提町・那谷町に通ずる主要地方道でありながら、今は人通りの殆どないトンネルがあります。県道 43 号線の通る戸谷隧道です。
昔から大杉の人々にとってこのトンネルの開通は大変な悲願でしたが、赤瀬ダムの建設によって小松へ出る道が広くなり、このトンネルは通らなくなりました。近年まで入口に「**有効幅員 80 ㎝**」の看板が掲げられていたので、若いライダーの間で「**険道**走行コース」、「オーラ」を感ずる場所として有名になり、通行するバイクが増えました。驚いた県土木事務所は看板を外し、危険を理由にトンネル両側の谷の入口にゲートを設けてカギを掛け、車両通行止めにしてしまいました。
トンネル全長 402m 高さ 2.5m　幅 2.5m で中に照明が無いので通るにはライトが必要です。トンネルへは、戸谷の入口から 1.5 ㎞で約 20 分で歩けます。昔、大杉小学校(現みどりの里)１年生の春の遠足は、学校から４㎞余り離れたこのトンネルまでオテテ繋いで歩くコースでした。

取り外された標識 →

４．　地名の由来について異聞

「大杉」地名の由来については色々の説がありますが、一説では、今の下大杉の自由広場の場所に、昔、とてつもなく大きな杉の大木がありました。ある時、高いところの得意な村人が、その大木の枝の長さを測ろうと一間(1.8m)の棒を持って登り、測りかけましたが途中で棒を落としてしまいました。落ちた場所を(棒) 菩提と言いました。仕方なく、腰に提げていたナタで測って行きました。しかし、それもついに落としてしまったので、木から降りて探した所が今の那谷町に落ちていたのでその地名がついたという。そんな大きな杉の木があったので「大杉」と言う地名になりました。

（谷口喜之さんに聞く）

５．　動 山（新丸の花立町の人達は昔「ごぼうの山」と呼んだ）

昔、動山の山頂に誰が安置したのか一体の地蔵様が祀られていた。ある時、新丸地区・花立村の若者がふざけてその地蔵様を家まで持って帰ってしまった。

翌朝目を覚ましてみるとその姿が見当たらなかった。よくよく探してみると村から約400～500m下った所におられた。また担ぎ上げるが、その都度その地まで転げ落ちておられる。調べてみるとその地は動山の山頂と標高が同じであった。怖れをなした村人はそこに安置小屋を設けて丁寧に祀った。それ以後、仕事や旅の休憩所として人々の安全を守り、現在も花立町のシンボルとして大切に祀られています。

場所は国同 416 号線から花立町に入る分岐点の傍らにあります。

（花立町　橋爪忠一さんに聞く）

６．　弘法の水

昔、みすぼらしい旅の御坊さんが大杉下村を通られ食物や水を懇願されたが、余りの汚さに誰一人物を差し出す人がいなかった。仕方なく大杉中村の方へ行かれ同じく願われたところ、慈悲深い人が丁重にもてなした。その御坊さんは、お礼に「これよりこの穴から出ずる水は絶える事が無いであろう」と持っていた杖で何ヶ所も地面を突きさし村人達に生水を与えた。それを聞いた下村の人達は前非を悔い、下村にもとお願いしたところ、それではと山の中腹に一突き杖をお突きになった。

それ以来、水は絶えることなく今も町内の水道源として流れ出ており、下町の人々も益々信仰深く人々に親切にするようになったという。

大杉中町には、今も４ヵ所に清水が湧き出ています。

７．　大杉円光寺跡（現在　千木野町）

大杉円光寺開基の蓮照応玄は京都本願寺の正統の息子として生まれたが、その時代に適すると思われた異母の子蓮如が世継となった。そこで母親の円光院如円と息子の応玄は、経典・宝物等を全部持ち出し、京をのがれて加賀に下向してしばらく津波倉本蓮寺に居候した後、小松市立少年自然の家（現在の大杉みどりの里）隣の小高い丘にあった天台宗のお寺跡に、円光院を開山した。

後に今の下大杉町に寺を移し、南谷山円光寺と寺号を定め近年まで存在した。現在は千木野町に移っている。

東本願寺では格式の高い寺院です。

８．　下大杉奇岩・奇石

イ．キツネ岩の夫婦石

ダム湖内の旧道路沿いの誰も気づかぬ場所に巨岩が二つあり、夫婦石と言う。

ロ．女郎岩

昔、大雪の折、動山から雪女が乗って雪崩と共に下りてきた岩。

（動山登り口より５０ｍ林道奥）

ハ．ヘビ石

石にたくさんの穴が開いており、白い蛇が住むという。

（動山登り口にあり）

ニ．ミンミラ壁

大きな壁の中央に耳のような石がついている。

（向こう谷、支谷、南谷奥にある）

９．　中町の小山の穴と下町の蔵跡

昔、共同の食物庫として使われた物という。

（中町の向かいの丘と大蔵蔵吉さんの後ろの谷）（上口淳史さんの話）

10.　下町の城山（下大杉生活改善センター後ろ）と、

山崎の城山（大杉みどりの里の後ろ）

昔、灌漑設備が整うにつれ食料の増産が進むと、一ヶ所に人々が集まってきて集落が大きくなってきました。それまではヒエ、アワ等を作り水の使いよい自然災害の少ない地域に数軒ずつ点在していました。集落化すると、外敵から守るため見晴らしのよい山や丘に見張りを作り、のろし等で合図をしあった場所。（上口淳史さんの話）戦時中、山崎の城山は監視所の山といい、敵の侵入を見張る小屋があった。また、山崎の城山には山崎高五郎の城があったという。（大西さんの話）大杉の城山には木曽義仲の家来で、六道某という武士が居を構えていたともいう。（大蔵蔵吉さんの話）

11.　大杉本町神社の大公孫樹（イチョウの大木）

推定樹齢 500～600 年、昔、山崎高五郎やその集団が弓矢の練習をしていた折、矢がどういう訳か左に逸れたのでその場所に植えたという。

大木の枝の付け根あたりからぶら下がっている幾つもの大きな垂れ乳は見事です。（大西さんの話）

12.　山崎の遺跡

イ．山崎（バンド谷）遺跡

大杉本町の鈴が岳へ通づる本谷の途中、通称バンド谷で昭和 29 年道路工事中に縄文中期の遺跡が見つかり、大量の土器や生活、作業用の石器が見つかった。

土器は当時南加賀で製造されていた、土器の表面の文様が木の葉の脈ようになっている葉脈状土器で、大杉谷式の標準遺跡として知られるようになった。

ロ．チャボガヤ

日本海側の田節地帯に育つ高さの低いガヤの木で、大杉神社の西側の堂谷に群生している。

ハ．綾家のつつじ

先祖は昔、蓮如上人がこられた折、京都の綾小路という所から供をしてきた。以後、円光寺の同行となった家で、道路に面した庭に植えられているつつじの古木。春開花すると見事である。(能美郡史)

ニ．赤滝

本町の本谷にある滝。

13.　御保谷(ごほたに)(大杉上町)の史跡

イ．御保谷の寺跡

今の大杉本町と大杉上町の間に光明寺という天台宗のお寺があったが、応永年間（1393～1428）に、ある争いに破れ、釣鐘や宝物を埋めて粟生町（寺井町）まで逃げ延び、後に浄土真宗に改宗し今も存続しているという。

（信長による全国統一で、この地域まで勢力を広めていた。越前の平泉寺の衰退や白山信仰の衰退、浄土真宗の隆盛がからみ合って、山岳宗教文化が変化していった。）

ロ．御保谷関所跡

藩政期、御保谷(大杉上町)までは加賀藩領であり、隣の新丸村は天領だったので境の尾小屋や御保谷に関所(番所)が置かれた。中村(大杉中町)には「番所」姓を名乗る家もあり、山崎(大杉本町)にも「バンドコ」を屋号とする家もあるので、存在した場所は時代によって移動したのかも？

ハ．穴ン谷の横穴

上大杉町の南、500m程の所に横穴があり、昔、この穴に人が住んでいた。伝説によるとこの穴の周りに寒椿が生えており、正直な村人がある時夢の中に観音様が現われ、この寒椿の下を掘れとのお告げがあった。その通りに掘ってみると、宝物が埋められていた。それ以後その家は金持ちとなり、10㎞も下流の打木の打谷まで谷の片側全部が同家の所有地となった。人々から「谷一郎（路)」と呼ばれ、寒椿の子株が今でもその屋敷に植え継がれていると言われている。　※ 一路家は実在した。（清水七衛さんに聞く）

二．マセ山洞窟遺跡

大杉上町の集落から約１㎞南に位置するマセ山の中腹に深さ５m近い大きな洞窟がある。積み重なった巨石の隙間の空間で、面積は奥行き10m、幅3m程あり縄文後期の遺物が発見されている。現在は中に下りるハシゴが設置されており、日本でも珍種のコーモリが生息している。

ホ．天然記念物　御保谷甌穴群

マセ山洞窟の下、大杉川河床の岩盤に自然にできた丸い穴が多く空いている。水流によって上流から運搬されてきた円礫が河床表面のくぼみにはまって、長年

同じ場所で回転することにより岩盤が侵食され、大小さまざまな凹部が出来た。これを甌穴(ポットホール)と呼ぶ。

当地では、河床の長さ約300mの区間に最大直径1m、深さ0.5mにも及ぶ甌穴約200か所も散在している。数万年という長年にわたり流流水と円礫による河床侵食が作り出した景観は、大変貴重な天然記念物と言えます。

14. 大杉を通った街道

現在、大杉を通る街道は、旧大杉谷村最北端の長谷地内で国道416号線から分岐して、下大杉町の桜橋に至る県道161線と丸山町の牛ヶ首峠で国道416号線と分岐して大杉４町内を通り、下大杉町の桜橋を渡って戸谷トンネルを通り、那谷町を経て加賀市分校町の国道８号線信号に至る県道43号線が縦貫しています。ただし、県道43号線は戸谷口と那谷・菩提境間、約4.5㎞区間は戸谷トンネルを含めて車両通行止めとなっています。

現代の車社会では、山の向こう側の離れた集落や町に行くため、山を大きく迂回しても時間はかかりませんが、車や電車の無かった昭和の初め頃までは、里の人も山の人も最短距離を探し、すべて徒歩で山を越え、川を渡って移動しました。

1300年昔、越前の僧泰澄大師一行が白山に登拝の後、市ノ瀬で越前禅定道から分かれて牛首川を下り、牛首(白峰)から幾つもの高山を越えて新丸の花立峠を下り、大日川沿いに下って丸山の谷から大杉上町の二俣谷へ入りりました。
マセ山の麓で大杉川を左岸に渡り、大杉本町の中、大杉みどりの里の前、大杉中町、下大杉町の川向いを通って更に下り、戸谷に入って山を越え、当時、岩屋寺と称した那谷寺に向かいました。この道が越前禅定道の支線であり、大杉を通っていた**南加賀白山禅定道**でした。粟津温泉に湯宿を開いた雅亮法師もこの道を通ったものと思われます。途中の菩提越峠の傍、エンギョ地区に修験者の修行場も出来て、中世の頃まで那谷寺からの禅定道として利用されました。今でも大杉の神社四社の神主は、先祖が山伏であった那谷の小島さんが務められています。(小島さんの話)

中世以降には大杉と周囲の村々との交流が多くなり、多くの峠道が開かれました。西へは下大杉の戸谷の菩提越峠を経て那谷、粟津方面へ、向谷からは上戸谷を経て江沼郡荒谷へ、大杉中町の向きやっ谷、易谷からは同じく今立、大土へ通ずる峠道がありました。1500年代、蓮如上人も易谷の大杉峠を越えて今立、四十九院を経て山中に向かわれています。

南へは大杉上町の二俣谷から丸山の大杉谷へ登る七曲り道と牛ヶ首峠を登って新丸の村々へ行く道がありました。七回り道は人馬のみですが、丸山へ行く近道として古くから通行されていました。
牛ヶ首峠道は大杉往来と呼ばれ、新丸５村が天領であった時代(1668～1869)から通行されていましたが、尾小屋～丸山間が大正８年に改修されて車両の通行ができるようになったので、牛ヶ首～神大杉の道路改修はズーと遅れ、昭和30年代にようやく着手

されて車両の通行ができるようになりました。
　東へは大杉上町から五百峠を経て尾小屋町に至る道、下大杉町の堂谷や大杉中町の堂谷を経て西俣町、尾小屋町に至る道がありました。尾小屋鉱山の栄えている時代には大杉からも良く通りました。

　昔から大杉には周囲の山を中心にした産業が発達していました。屋根瓦のかわりのコバ作り、薪、木地用材、養蚕、炭焼きが盛んでした。、炭焼きは大杉の山が伐り終わると、東北から中国地方まで出掛けて炭焼き業を営みました。また、石油文明の来るまで小松の燃料の基地として、炭や薪を積んだ馬車が毎日 100 台も連なったといわれる程、燃料の供給に貢献しました。
　昭和 40 年代頃までは木材、製材業は大杉だけで十数工場あって従業員 100 名以上が働き、戦後、小松市街の復興資材として小松の大半の家は大杉谷、新丸地区の木が使われていました。しかし、新建材の出現によりこれも時代の流れと共に衰退し、今では面影もありません。また、大杉四ヶ村で戦前まで小学校が２つあり、戦後は小・中学校 1 校になりましたが、40 年代末までは多くの子供たちが学んでいました。
　昭和 53 年赤瀬ダムの完成によって大杉往来は広くなり、舗装されて小松への通行は早くなりましたが、過疎化が急速に進み、小学校も無くなり住民も殆どいなくなって限界集落になってしまったことは淋しい限りです。